石原町東広場等リノベーションプロジェクト
基本計画（案）

令和８年●月

門真市

目次

０．はじめに……1

１．現況整理
（１）計画地の概要……2
（２）計画地周辺の概況……3
① 成り立ち……4
② 周辺のまちづくりの動向……5
（３）計画地の利用状況……6

２．公園への市民意向の把握
（１）関連計画での市民意向……8
（２）社会実験での市民意向……18

３．整備の方向性
（１）課題とポテンシャル……25
（２）踏まえるべき視点……26
（３）導入機能……26

４．整備コンセプト……27

５．整備方針と実現に向けた方策……28

６．整備計画
（１）整備案の検討……30
（２）整備案の検討を通じて……32

７．整備スケジュール……33

００　はじめに

本市では令和５年５月に「古川橋駅周辺地区まちなかウォーカブル推進基本構想」を策定。全体コンセプトを「PLAY FURUKAWABASHI」とし、多様な場所・アクティビティ・シーンのある PLAYFUL（遊び心のある）なまちとして、「笑いのたえないまち門真」の象徴となることを目指し、取組みを進めている。

本計画は同構想に位置づけた、「石原町東広場等リノベーションプロジェクト」の基本計画である。検討に先立ち、令和５年 11 月に石原町東２号広場・石原町東公園・石原町東広場等を検証エリアとする社会実験、「PLAY FURUKAWABASHI Vol. 1 」を実施。本計画は、同実験の効果検証結果をもとに作成したものである。

資料：古川橋駅周辺地区まちなかウォーカブル推進基本構想（全体コンセプト）

資料：PLAY FURUKAWABASHI Vol. 1 （フライヤー）

資料：PLAY FURUKAWABASHI Vol. 1 （実験の様子）

０１　現況整理

１　計画地の概要

名称　：石原町東２号広場・石原町東公園・石原町東広場
所在地：門真市 石原町16、石原町16-18、石原町６-17
面積　：約550.6㎡（石原町東2号広場）/約431.4㎡（石原町東公園）/約485㎡（石原町東広場）

■現況写真

＜石原町東２号広場＞

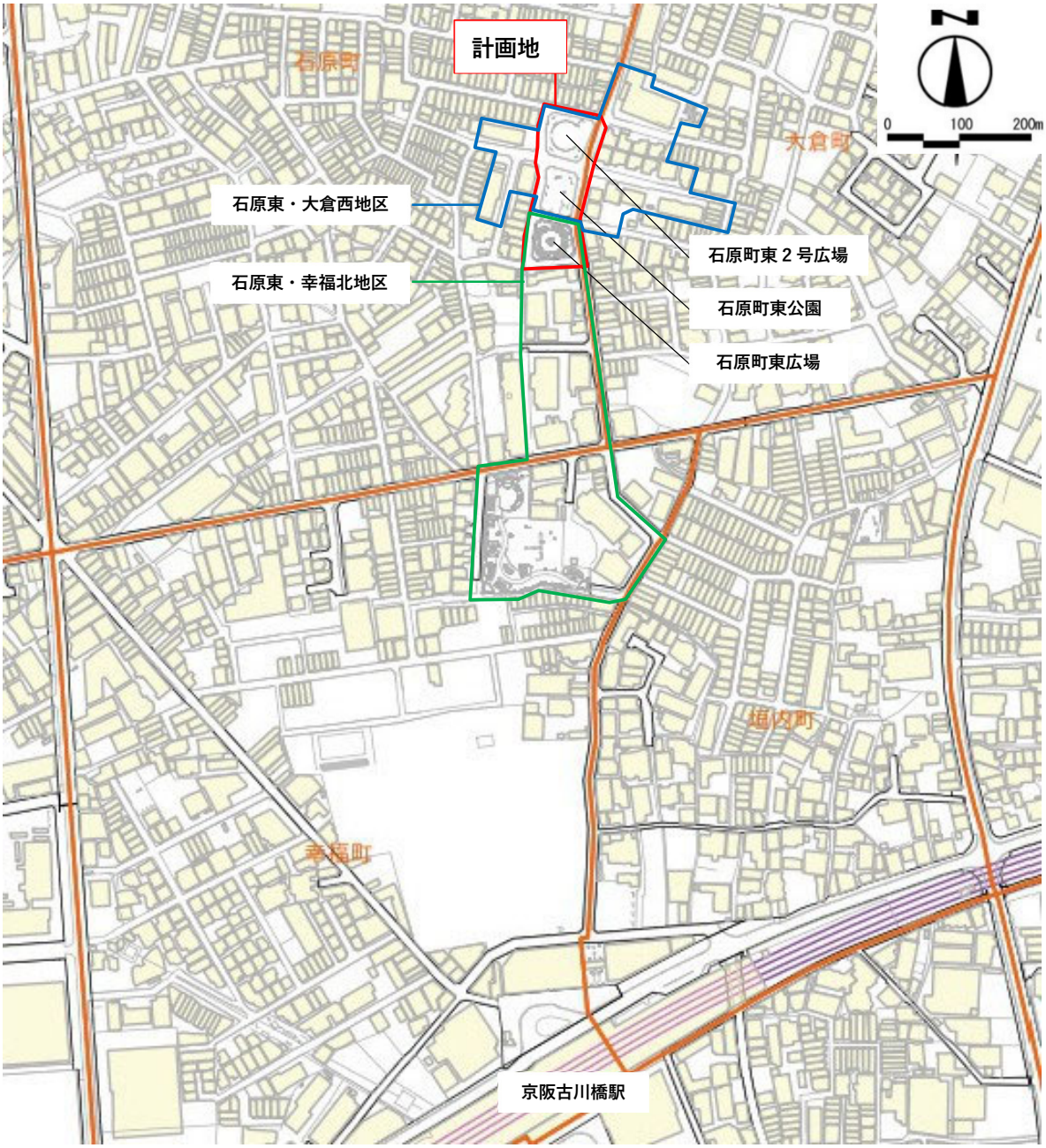
＜石原町東公園＞

＜石原町東広場＞

2 計画地周辺の状況

計画地は、京阪古川橋駅北側の石原町と大倉町の境界部に位置し、土地区画整理事業等によって形成された２つの地区（石原東・幸福北地区および石原東・大倉西地区）に属する。

■位置図



資料：門真市 石原町・大倉町 まちづくり基本構想

① 成り立ち

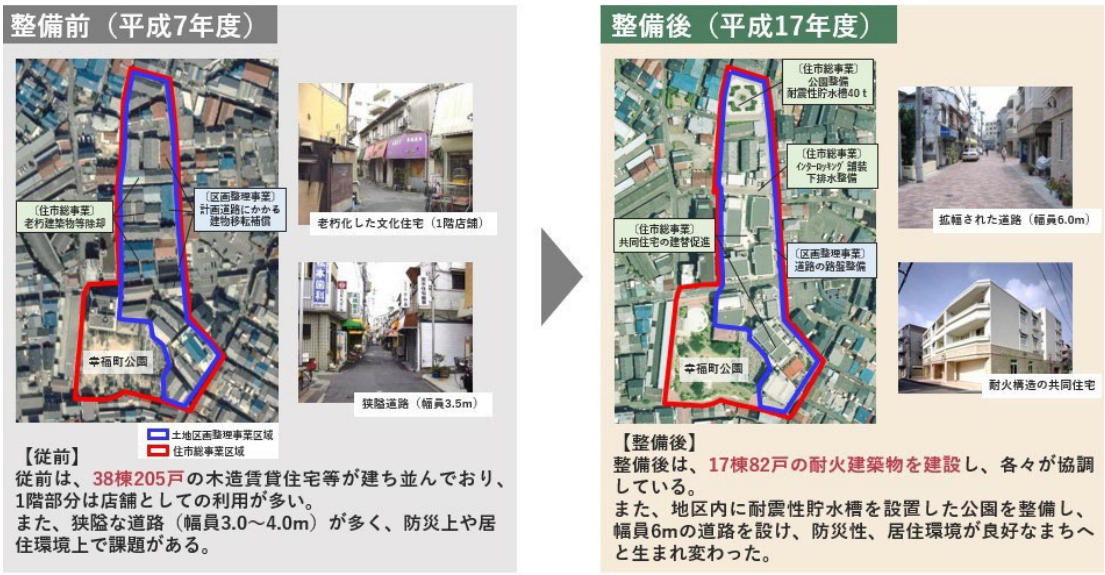
■石原東・幸福北地区

・住宅市街地総合整備事業と土地区画整理事業の合併施行により事業を行った地区。

・整備前は、38棟205戸の木造賃貸住宅等が建ち並んでおり、狭い道路が多く、防災上や居住環境上の課題があった。

・整備後、17棟82戸の耐火建築物を建設し、耐震性貯水槽を設置した公園を整備し、幅員6mの道路を設け、防災性、居住環境が良好なまちへと生まれ変わった。

・まちのコンセプトを設け、デザインを統一することにより、美しいまちなみの形成に努めた。



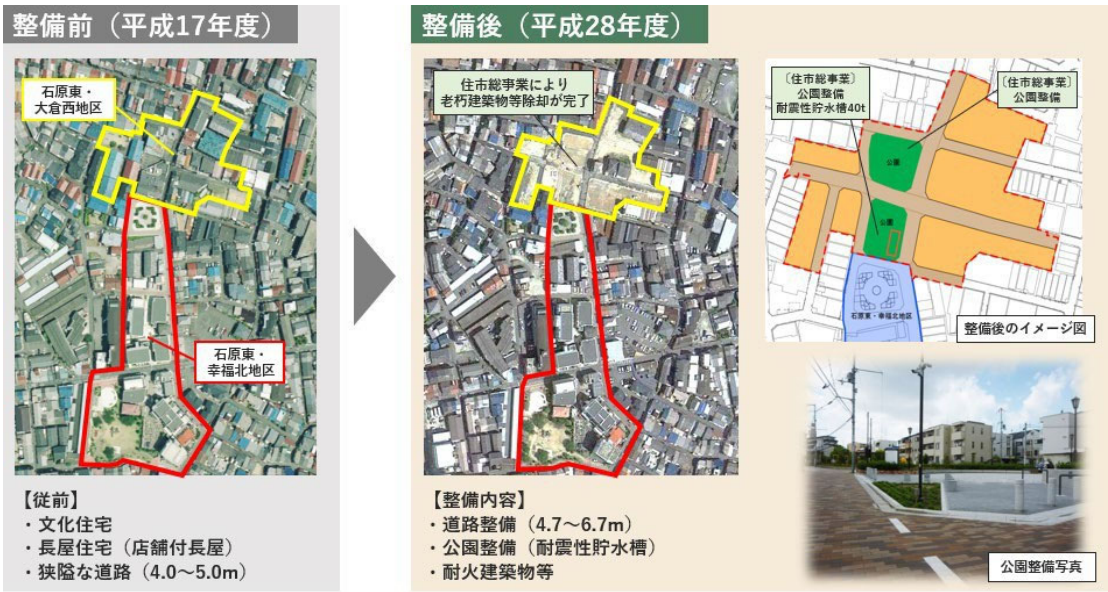
資料：門真市 石原町・大倉町 まちづくり基本構想

■石原東・大倉西地区

・先に完成した「石原東・幸福北地区」に隣接し、同様の手法を用いて開始された地区。

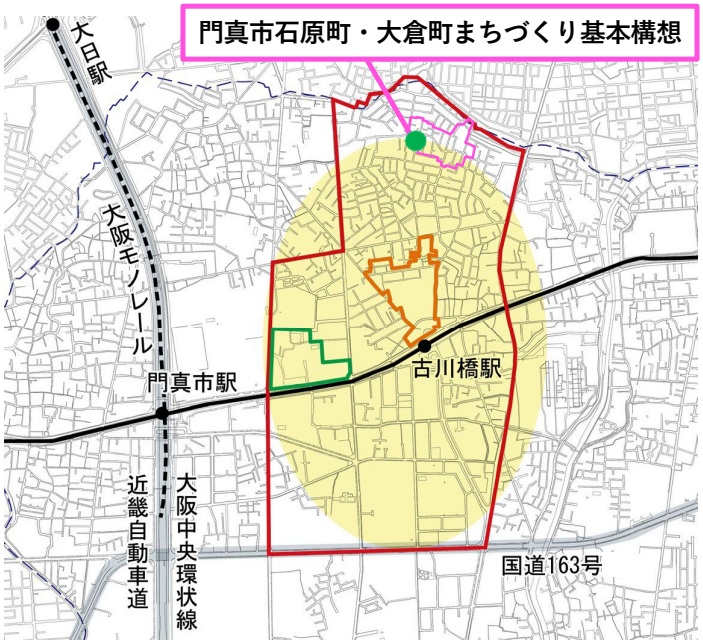
・従前は、市道がなく私道が多く、21棟148戸の木造賃貸住宅等が建ち並んでおり、狭い道路が多く防災上や居住環境上に課題があった。

・まちのコンセプトを設け、まち全体が協調した美しい街並みの形成に努めた。



資料：門真市 石原町・大倉町 まちづくり基本構想

② 周辺のまちづくりの動向



門真市石原町・大倉町まちづくり基本構想

≪まちづくりのコンセプト≫

安心して住み続けられる・楽しみを見つけて暮らし続けたくなるまち

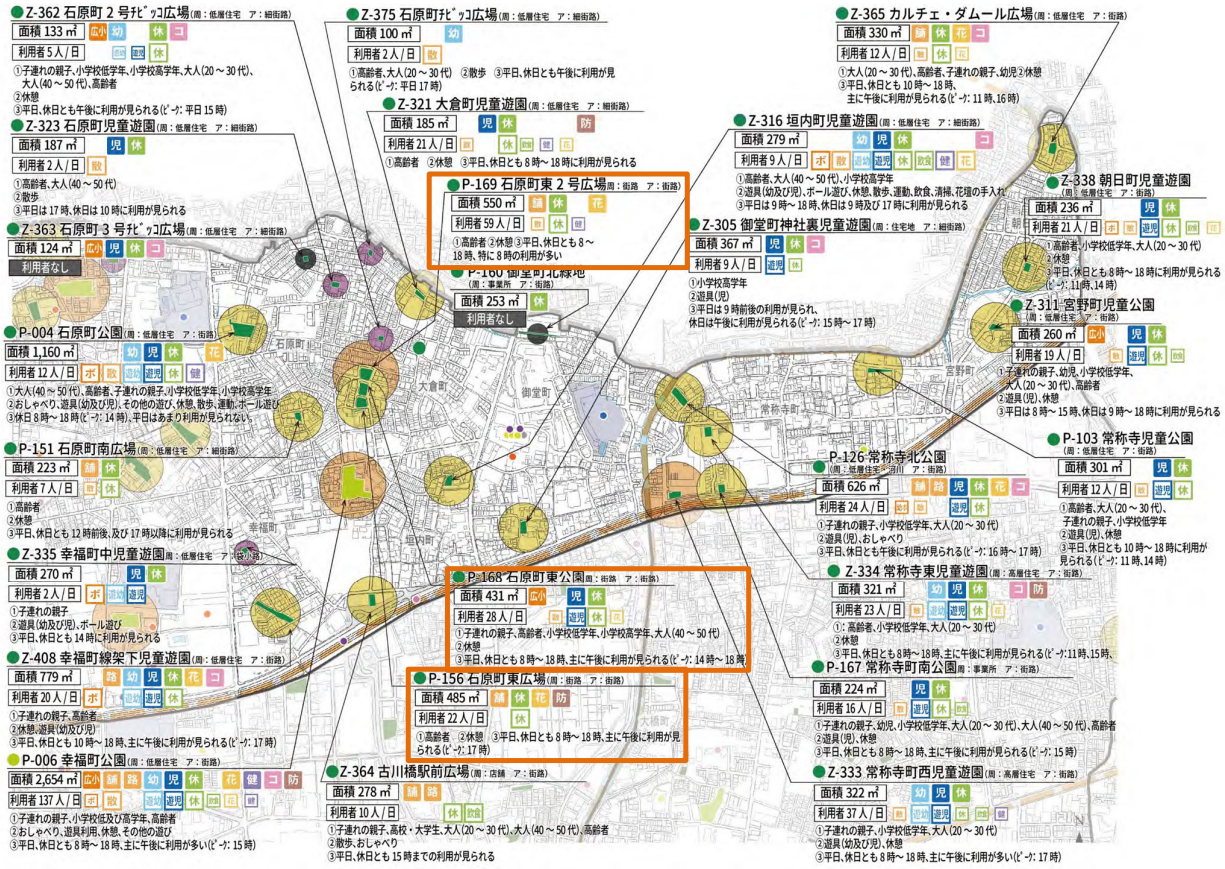
【まちづくりの方向性】
（1）防災性を高め、安全・安心で、いつまでも住み続けられる持続的なまちづくり
（2）多様な場を創出し、新・旧の交流が生まれる共生のまちづくり
（3）生活となりわいが共栄するまちづくり

3 計画地の利用状況

■門真市 パークイノベーション計画

計画地は門真はすはな中校区内に立地する。調査結果によると、利用者数は石原町東２号広場で「59人」、石原町東公園では「28人」、石原町東広場では「22人」である。主な利用者層は“高齢者”と“小学生“、”子連れの親子“、主な利用内容は”休憩“であり、主な利用時間帯は平日、休日ともに”８時～18 時（主に午後利用が多い）“である。様々な世代の利用が見られるものの、いずれの公園も1日当りの利用者数は少なく、利用率向上に向けた改善が必要な状況である。

同計画（令和 5 年３月改定版）によると、市域内の公園規模が 300 ㎡未満ものが半数近くを占める。傾向として公園面積と利用者数には一定の比例関係が見られる。



資料：門真市 パークイノベーション計画 利用実態調査結果【門真はすはな中学校区（その２）】

■民間事業者等による利用

民間事業者等が企画・主催する 20 年以上の歴史を持つイベントの開催地として、複数回に渡って計画地が活用されている。

＜石原町東２号広場＞

＜石原町東２号広場＞

＜石原町東広場＞

資料：「ふれ愛・にぎわい！ラブリーフェスタ 2024」会場写真（令和 6 年 10月開催）

■その他の利用

地域住民へのヒアリング等より、石原町東 2 号広場で高齢者によるラジオ体操活動が日常的に行われていることを確認している。パークイノベーション計画による利用実態調査においては、石原町東 2 号広場の利用者数が石原町東公園および石原町東広場の利用者数よりも多い。これはラジオ体操活動が一つの理由となっている可能性がある。

０２　公園への市民意向の把握

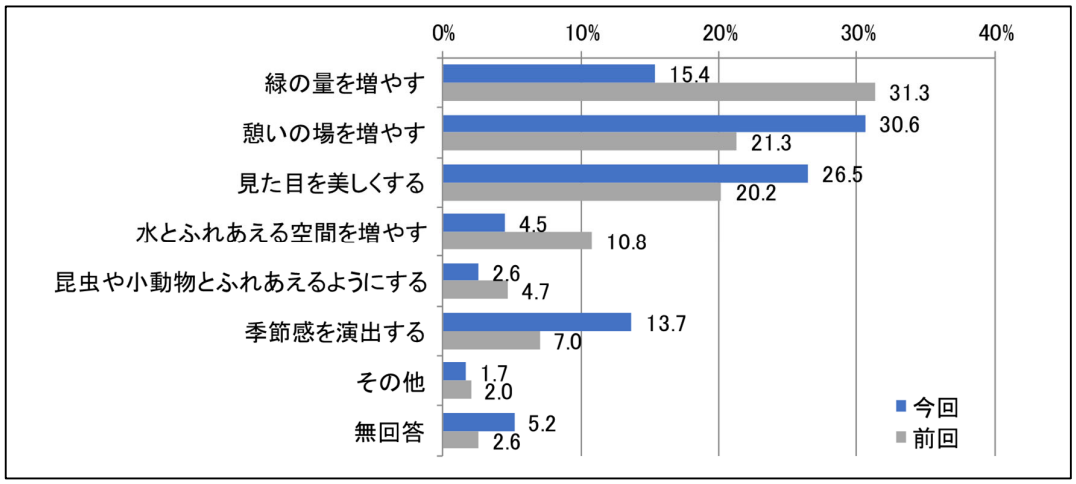
１　関連計画での市民意向

■門真市 みどりの基本計画

同計画（令和２年３月改定版）の“みどりに関わる市民意識”に関するアンケート等の調査結果を下記にて抜粋する。アンケート等の結果を踏まえて、整備計画を検討する。

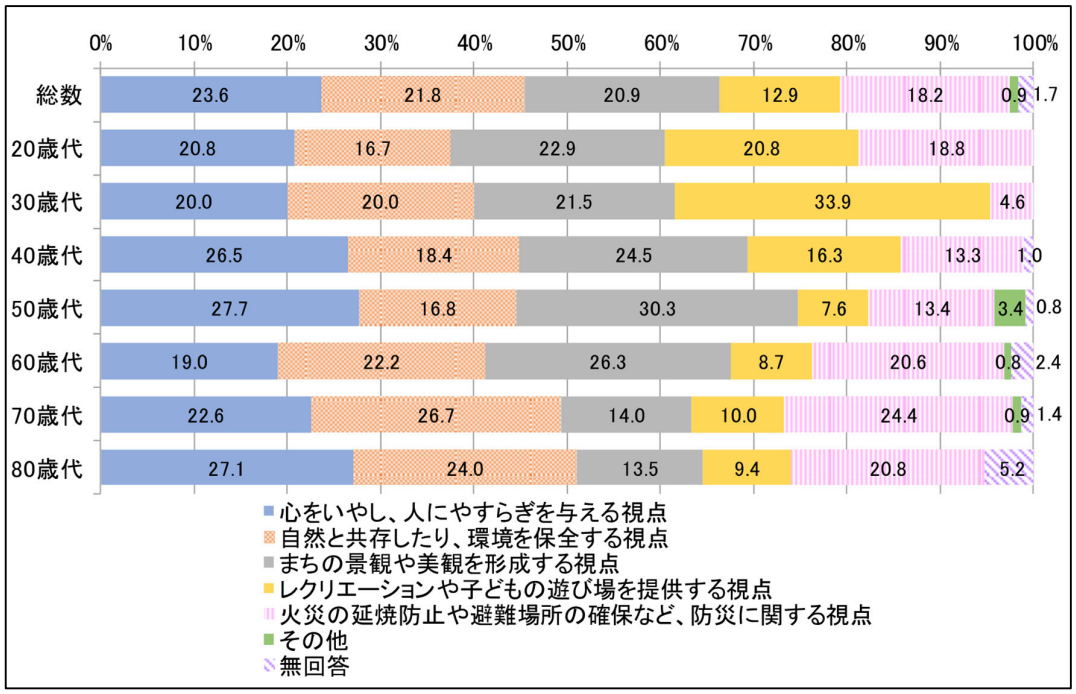
問：門真市のみどりに対して望むこと

「緑の量を増やす」が大幅に減少している。一方で、**「憩いの場を増やす」「見た目を美しくする」「季節感を演出する」は増加**していることがわかる。



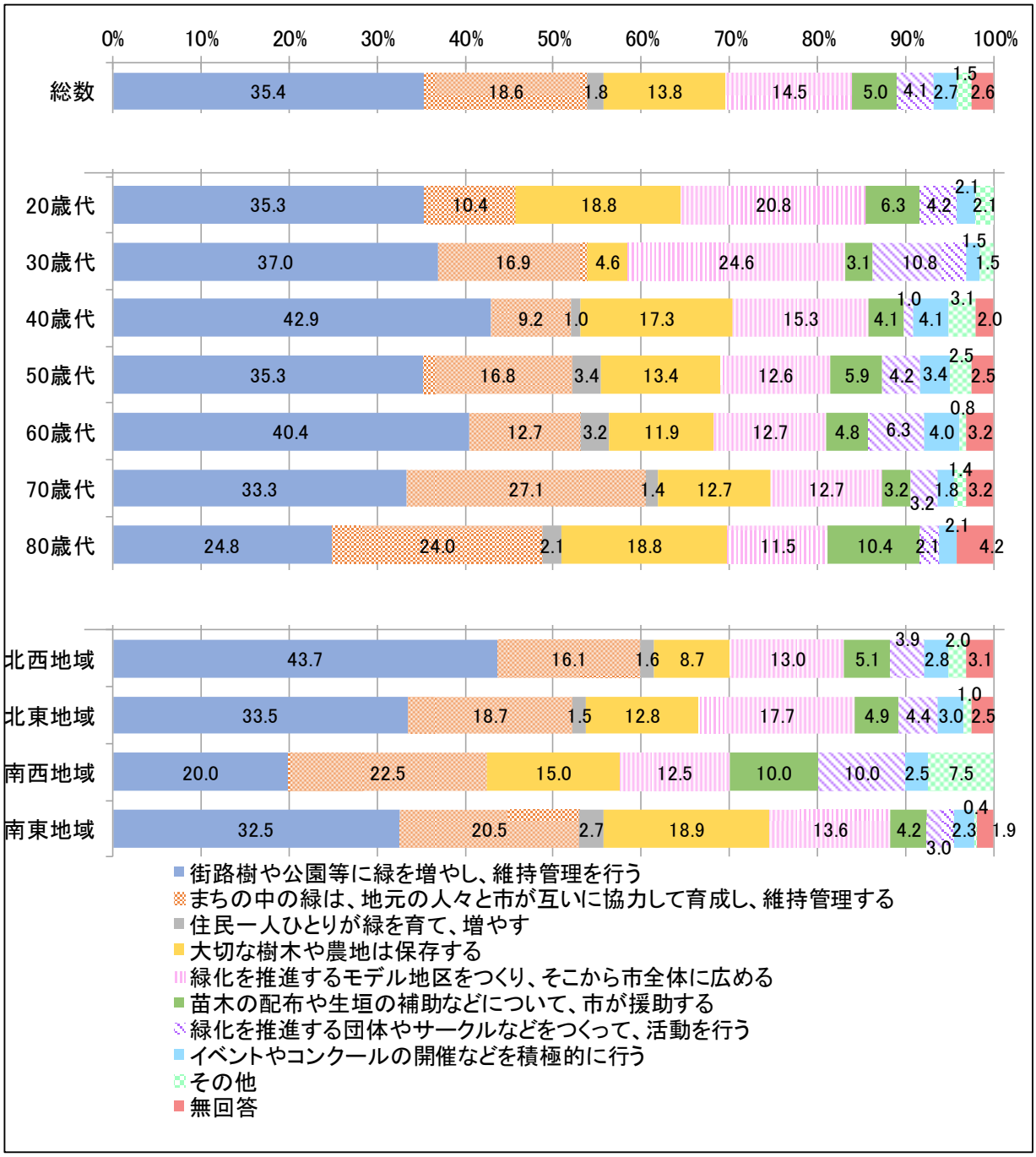
問：門真市のみどり施策を進めるにあたり必要な視点

全体では**「心をいやし、人に安らぎを与える視点」と回答する割合が高くなっている。20 歳代から 40 歳代の子育て世代は「レクリエーションや子どもの遊び場を提供する視点」と回答する割合が高く**なっている。**居心地の良さの向上に加えて、誰かと過ごしたくなる居場所づくりが求められている。**



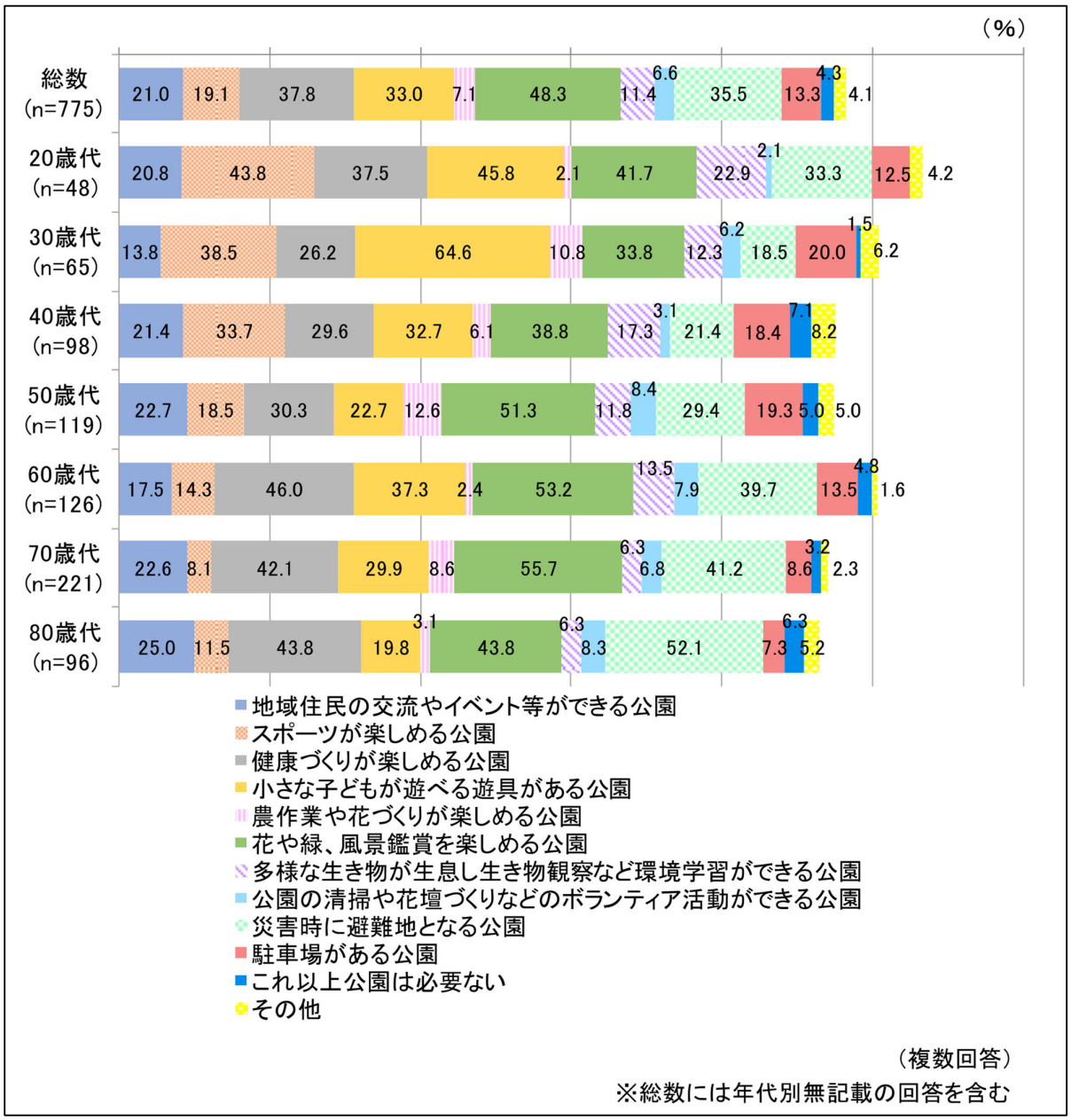
問：門真市に必要となるみどり施策

全体では、「街路樹や公園等に緑を増やし、維持管理を行う」と回答する割合が高くなっている。年代別の回答を見ると、**20 歳代や 30 歳代は「緑化を推進するモデル地区をつくり、そこから市全体に広める」、70 歳代や 80 歳代は「まちの中の緑は、地元の人々と市が互いに協力して育成し、維持管理する」と回答する割合が高くなっている。公民が連携しながら、維持管理を含めて公園等の緑を大切に扱い、緑化を推進する施策が期待**されている。



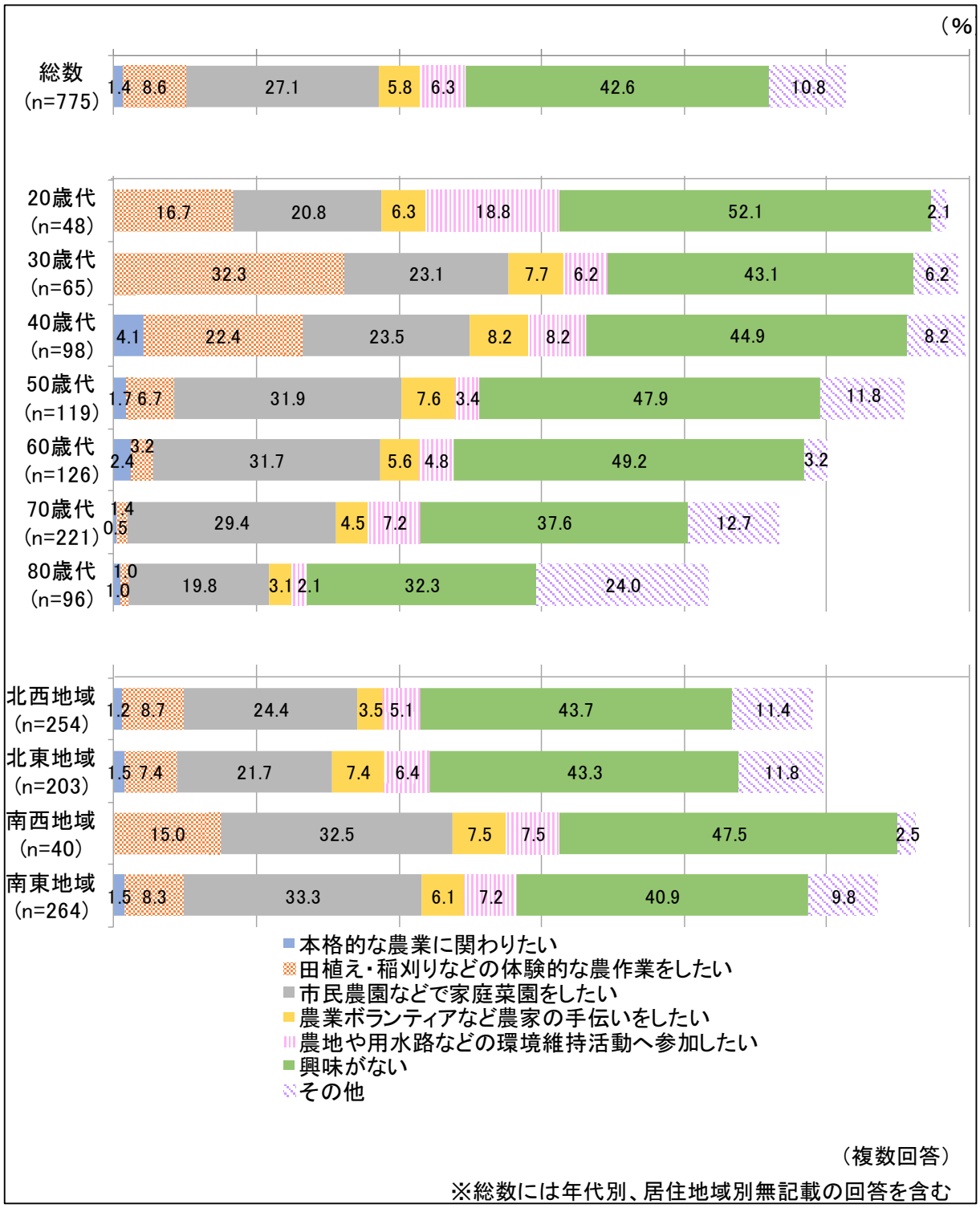
問：あればよいと思う公園

全体では、「花や緑、風景鑑賞を楽しめる公園」と回答する割合が高くなっている。年代別にみると、**20 歳代と 30 歳代は「小さな子どもが遊べる遊具がある公園」と回答する割合が高く**なっており、**60 歳代から 80 歳代は**「健康づくりが楽しめる公園」「**災害時に避難地となる公園」と回答する割合が高い。**



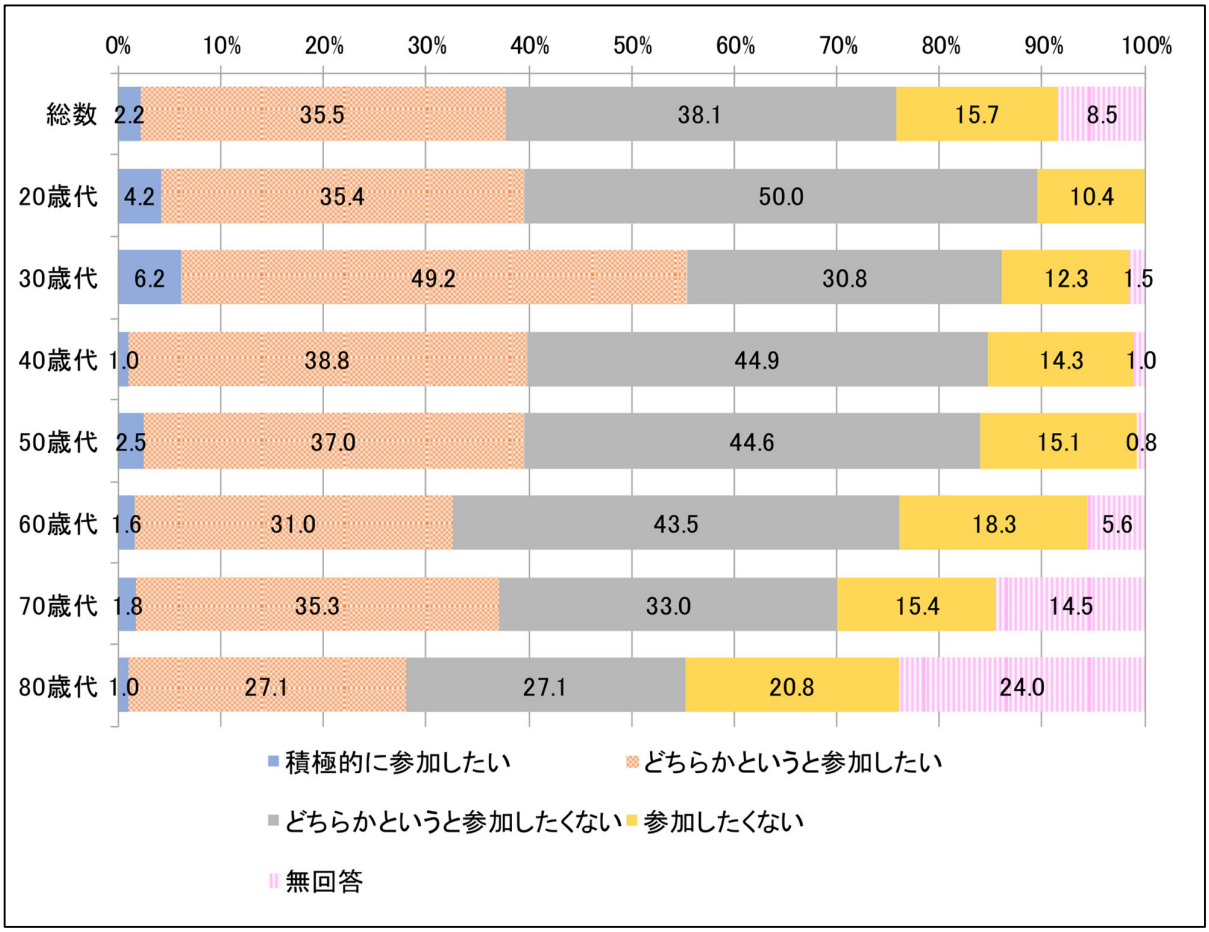
問：市街地への農地への関わりの意向

20 歳代から 40 歳代の子育て・働き世代は「市民農園などで家庭菜園をしたい」「田植え・稲刈りなどの体験的な農作業をしたい」**と回答する割合が高い。**また、**地域を問わず「家庭菜園をしたい」と回答する割合が高い。**このように**農的な空間や体験に対する需要は高く、実現のためのスペースや仕組みづくりが必要とされる。**



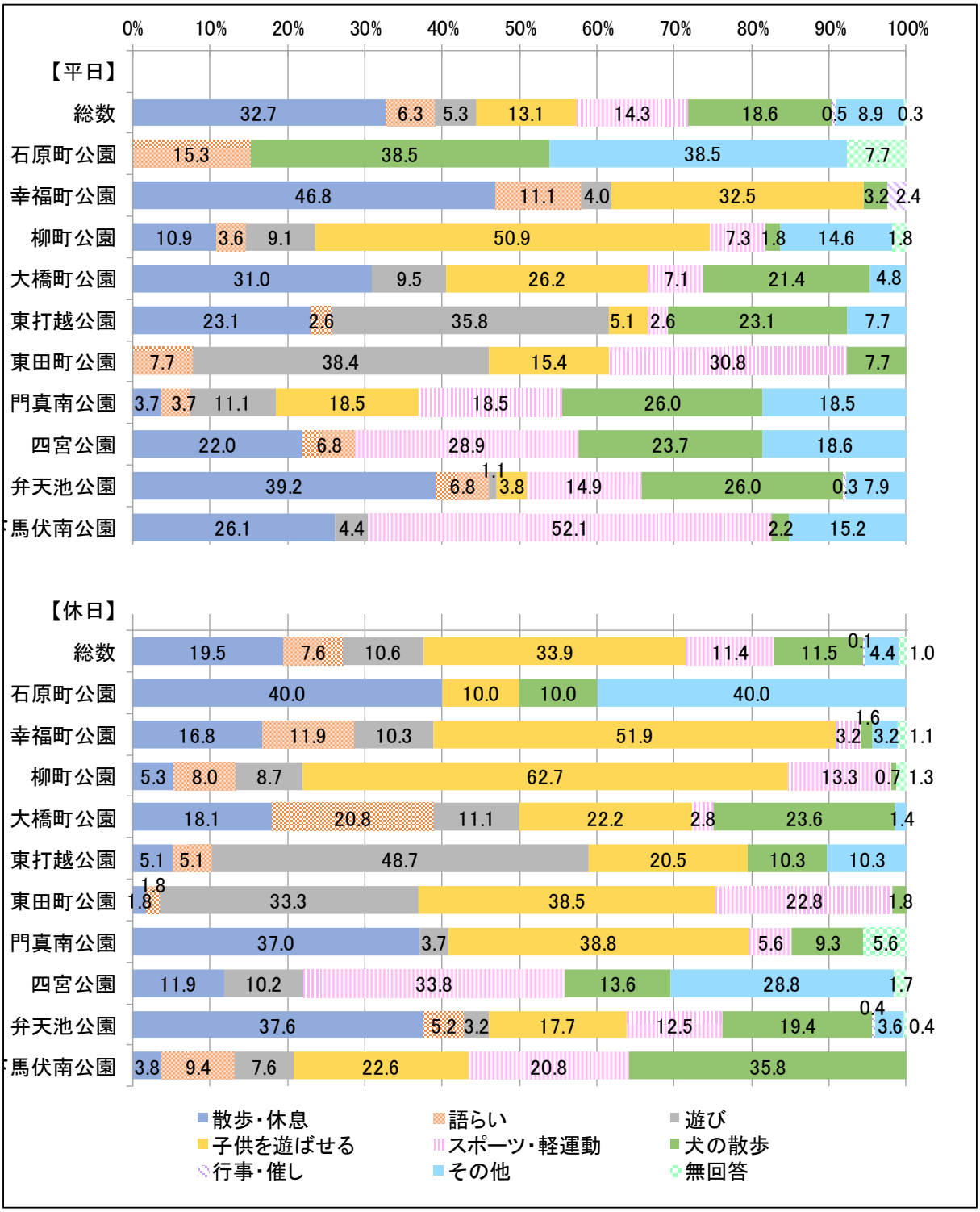
問：これからのみどりの活動へ参加意向

参加したい割合と参加したくない割合はほぼ同じである。全体では、35%を超える割合が参加意欲を示す結果となっている。年代別にみると、**30 歳代が最も参加意欲が高くなっており、20~70 歳代のどの年代においても 3 割以上が参加意欲を示している。**



問：公園の主な利用状況

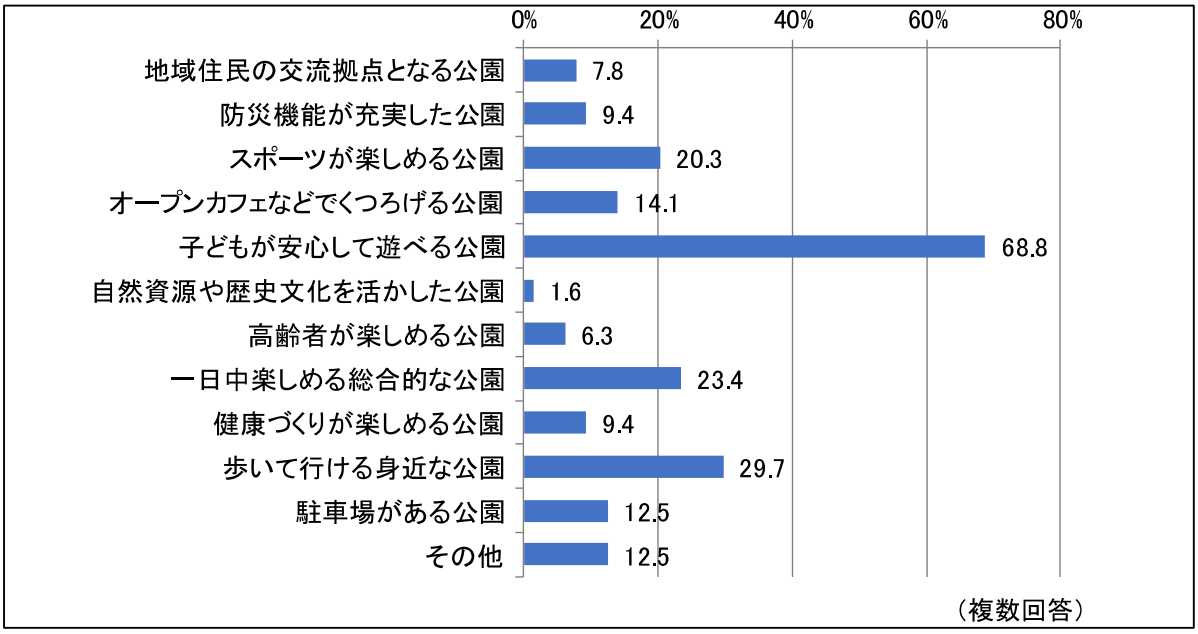
平日は「散歩・休息」「犬の散歩」の利用が多くなっており、**休日は「子どもを遊ばせる」「散歩・休息」の利用が多くなっている。**



●子育て施設等利用者ヒアリング調査結果

問：今後の門真市の公園整備に期待すること

「子どもが安心して遊べる公園」が最も多く、次いで「歩いて行ける身近な公園」となっている。



【みどりに関する市民意向のまとめ・考察】

みどりに関する市民アンケートから、本市のみどりの量は少ないと感じながらも、**単に量を増やすのではなく**、駅前や公共施設など**人が集まりやすい場所のみどりの質を高めることを重視**していることがうかがえる。みどり施策を進めるには、憩いの場としてはもちろんのこと、レクリエーションや子どもの遊び場、近年頻発している災害に備えるための視点も求められている。農地については、田植え体験や**市民農園など、気軽に参加できる農業に関心がある**ことがうかがえる。公園利用者及び子育て施設等利用者のヒアリング調査からは、公園の遊具やトイレなどの設備面での課題や、**子どもたちが安心して遊べる公園の整備**が望まれていることがうかがえる。

これらのことから、みどりの質を高め、景観を美しく保ち、心地良い空間を創出することが求められていることが分かる。

■門真市 パークイノベーション計画

同計画（令和５年３月改定版）の市民意向に関するアンケート等の調査結果を踏まえ、計画を検討する。16歳以上の市民を対象にした、“市民アンケート”および子ども（小学校低学年・高学年、中学生）を対象とした、“こどもアンケート”の２種類にて行われた。調査結果を下記にて抜粋する。また、実施概要は以下の通りである。

＜市民アンケート実施概要＞

■調査対象者：市内在住の 16 歳以上の市民から無作為抽出【1,500 名】

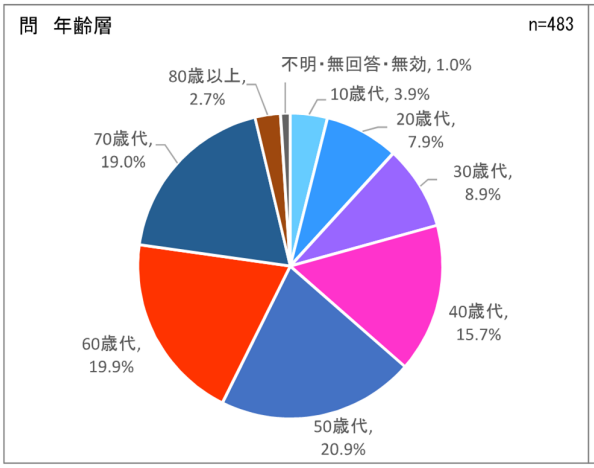
■調査方法：郵送配布・回収による調査

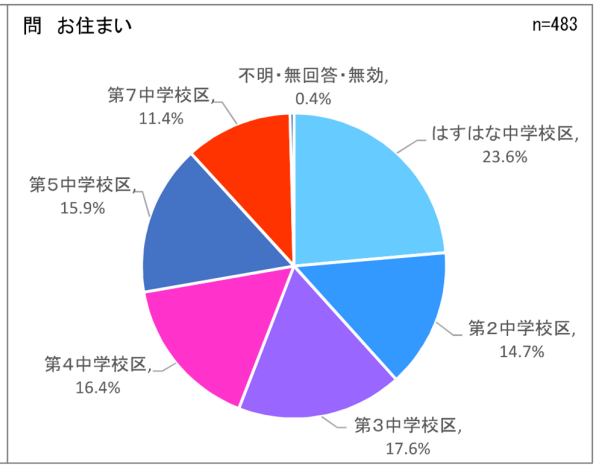
■調査時期：調査票の投函：令和３（2021）年５月 28 日（金）

回収期限：令和３（2021）年７月５日（月）

■回収率：有効回答数 483 票（回収率 32.2%）

■回答者属性





＜こどもアンケート実施概要＞

■調査対象者：市内全 14 小学校及び 6 中学校を対象に、小学校低学年（2 年生）、小学校高学年（5 年生）、中学生（2 年生）を対象として実施

■調査方法：各学校を通じた直接配布・回収による調査

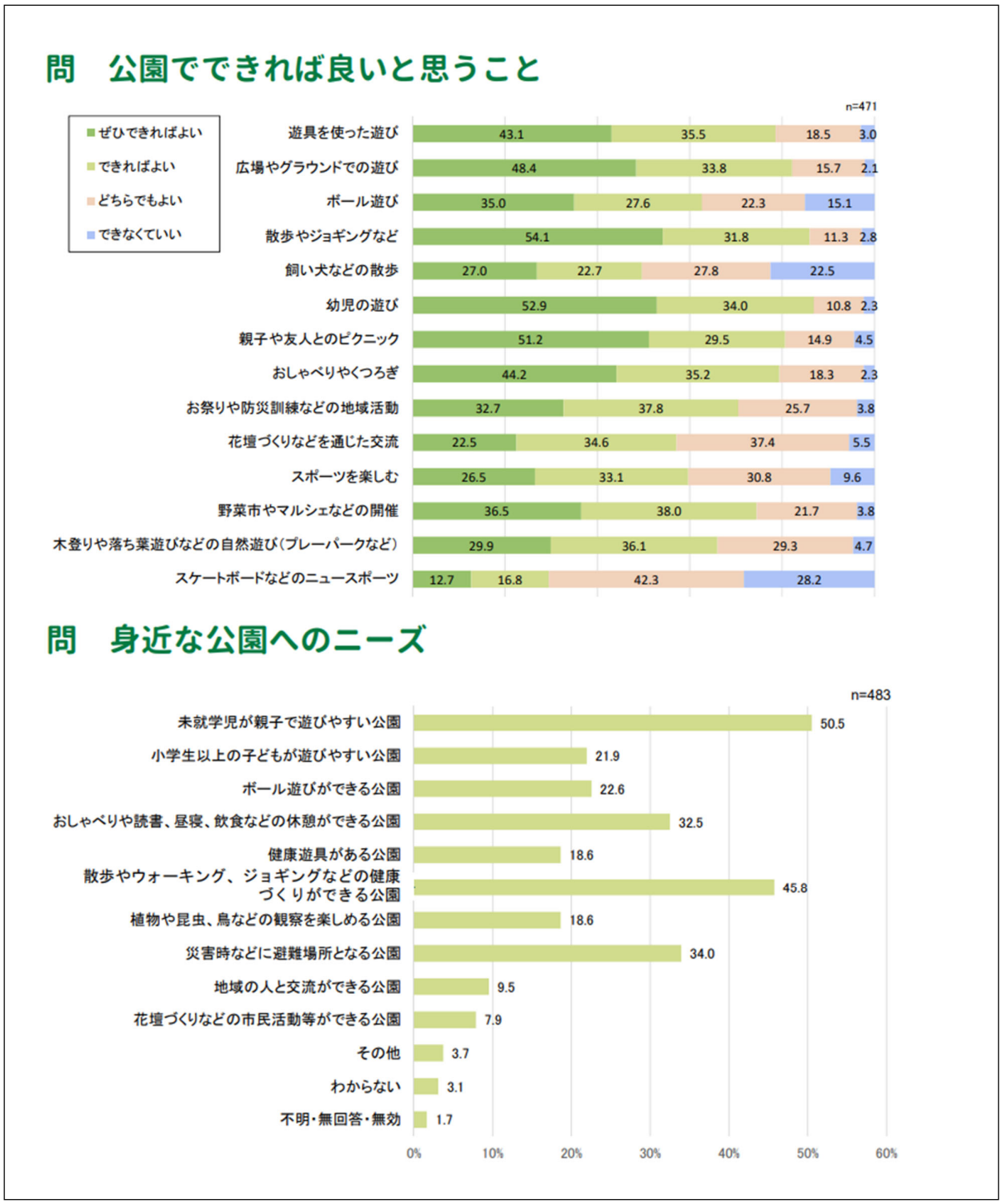
■調査時期：令和３（2021）年５月～６月

■回収結果：小学校低学年（２年生）：407 票

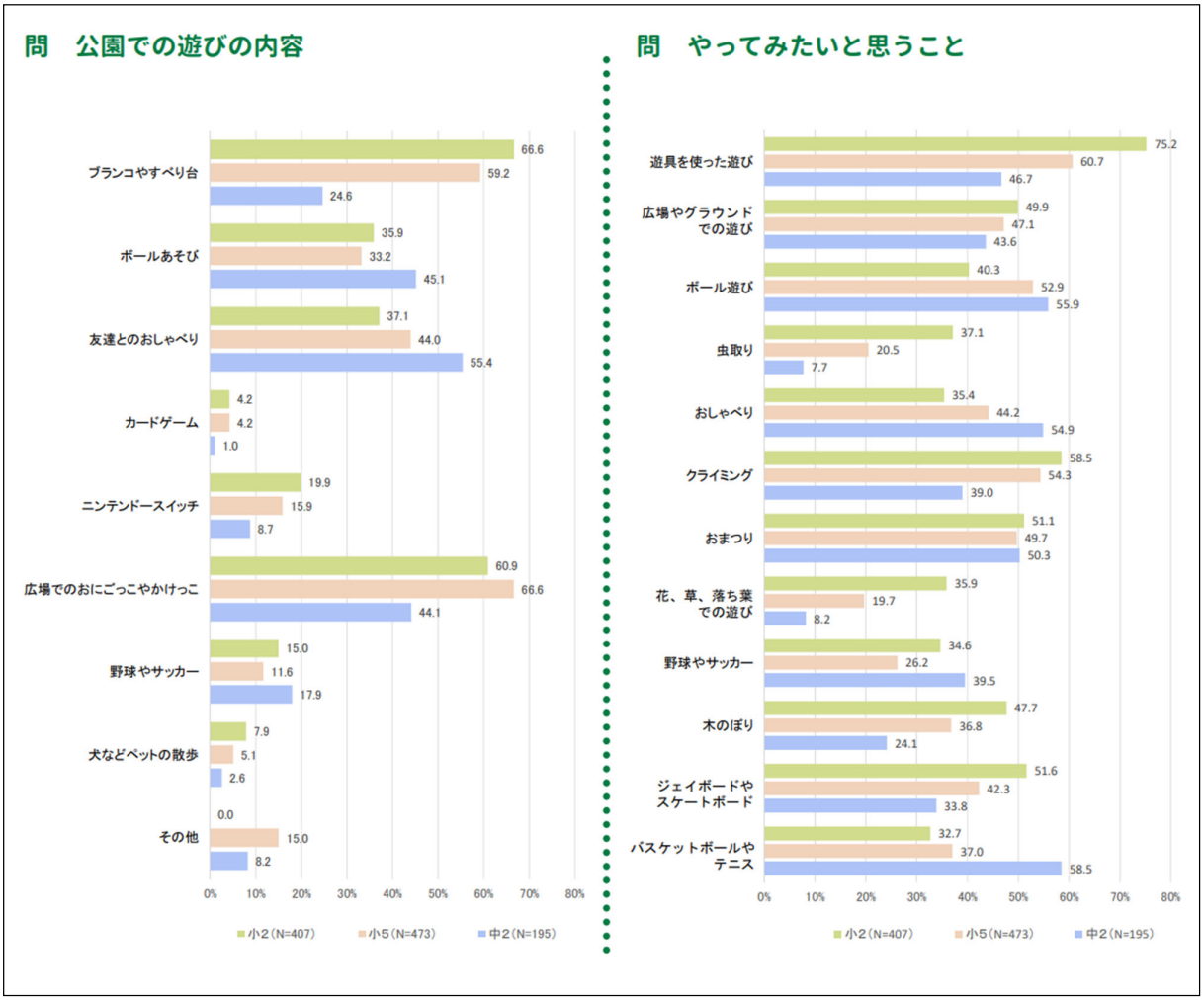
小学校高学年（５年生）：473 票

中学校（２年生）：195 票　　合計 1,075 票

公園に対する市民アンケート調査では、公園でできれば良いと思うことは「幼児の遊び」「広場やグラウンドでの遊び」といった子どもたちの遊び場の充実に関するものや、「親子や友人とのピクニック」など、**子育て世代が過ごしやすい場所へのニーズが高い。**また、**「散歩やジョギング」など、健康づくりの場としての充実が求められている**ことがわかる。（門真市パークイノベーション計画 P43～）



こどもアンケートでは、公園での遊びの内容は、小学校低学年は遊具遊び、高学年は広場遊び、中学生は友達とのおしゃべりが最も多く、**年齢層ごとに遊びの内容が異なる**ことがわかる。
やってみたいと思うことでは、**ボール遊びなど体を動かす遊びへのニーズが高く**、遊具遊びだけではない多様な遊びの場へのニーズが高い。



2 社会実験での市民意向

① 実験の目的

石原町東広場等のウォーカブルな環境づくりについて検証することを目的に実施した。

② 実験内容

ボール遊び・滞留空間・マルシェスタンドの設置等の地域ニーズを踏まえて実施コンテンツを検討し、下記の内容を実施した。

＜道路上へのベンチ付き自転車スタンドの設置＞

＜公園内未利用空間へのマルシェスタンド及び滞留テントの設置＞

＜ボール遊び等の実施＞

＜実験時の会場全体の様子＞

③ 実験状況

実施項目	20 日 （月）	21 日 （火）	22 日 （水）	23 日 （木・祝）	24 日 （金）
道路上へのベンチ付き自転車スタンドの設置	● 14:00～ 16:00	● 14:00～ 16:00	● 14:00～ 16:00	● 11:30～ 16:00	● 14:00～ 16:00
公園内未利用空間へのマルシェスタンド及び滞留テントの設置	―	―	―	● 11:30～ 16:00	―
遊びコンテンツの実施	● 14:00～ 16:00	● 14:00～ 16:00	● 14:00～ 16:00	● 11:30～ 16:00	● 14:00～ 16:00

※自転車スタンドは長時間の自転車放置対策のため、通勤・通学時間帯を外した時間帯で実施した
※遊びコンテンツは、近隣の小学生等の下校時間及び日没時間を考慮した時間帯で実施した

④ **効果検証**（石原町東広場等リノベーション PJ_社会実験報告より抜粋）

調査方針の設定

実験の目的を踏まえ、3 つの調査方針を設定した。

調査方針 1　ボールパーク化における安全と周辺への影響の確認
調査方針 2　多世代の滞留・活動に必要なことを確認
調査方針 3　基本計画に向けた方針の整理

調査結果

会場来訪者を対象に行った**全体アンケート**（大人向け（高校生以上）や子ども向け（高校生以下））および**マルシェスタンド出店者向けのアンケート**、**観察調査**等からわかった事を以下にまとめる。

＜**大人向けアンケート**＞※高校生以上が対象

◆10～70 代まで満遍なく訪れていた。自治会に所属していない人の割合が多かった。大人の同行者に占める子どもの割合が高い。

・質問「来場者の年齢」に対して、平日は「30~39 歳」の方が 80%と最も多かった。祝日は「20~59 歳」の幅広い年齢の方が 92%来園した。

・質問「所属自治会」に対して、 門真市内にお住まいの来園者のうち 「大倉町自治会」と「石原東町会」がそれぞれ 20%という結果になった。

・質問「同行者」に対して、 平日・祝日ともに子ども連れの参加者が多く訪れた。平日は「子ども」が 80%、祝日は「子ども」が 24%という結果となった。

◆キッチンカー・カフェスタンド、マルシェ、フリマを望む人の割合が高い。また、それらを企画したいという回答者がいた。

・質問「石原町エリアに飲食ができる場所(キッチンカー・カフェスタンドなど)があった方が良いと思いますか? 」に対して、 平日は「あった方が良い」が 70%、祝日は「あった方が良い」が 80%という結果になった。

・質問「石原町エリアにてご自身で企画したいことはありますか? 」に対して、「キッチンカー」が 1 人、「カフェスタンド」が 1 人、「マルシェ」が 1 人、「ものづくりワークショップ」が 2人、 「駄菓子屋」が 1 人いた。

・質問「石原町エリアで今後どのような企画に参加したいですか？」に対して、「キッチンカー」と「フリーマーケット」、「駄菓子屋」がそれぞれ 23%、「ものづくりワークショップ」と「カフェスタンド」がそれぞれ 20%という結果になった。

→仮設店舗向けのスペース・設備（電源、水栓等）の設置が整備検討に値する。

◆ボール遊びを望む人の割合が多い。

・質問「石原町エリアに遊びができる場所(ボール遊びなど)があった方が良いと思いますか? 」に対して、平日は「あった方が良い」が 80%、祝日は「あった方が良い」が 88%という結果になった。

→常設のボール遊び用フェンスの設置が検討に値する。

◆休憩ができる場所を望む人の割合が多い。

・質問「石原町エリアに休憩ができる場所(ベンチなど)があった方が良いと思いますか? 」に対して、平日は「あった方が良い」が 70%、祝日は「あった方が良い」が 80%という結果になった。

→ベンチやテーブルの設置が検討に値する。

◆近所に住んでいる人の利用が多い。

・質問「石原町エリアには普段どのような理由で訪れますか? 」に対して、平日は「周辺に居住しているため」が 70%、祝日は「周辺に居住しているため」が 68%という結果になった。

→一定の仕掛けを行えば、近隣住民を中心に公園利用者は増える。

＜子ども層向けアンケート＞※幼児・小学生・中学生が対象

◆幼児、小学生の半数以上が遊具を使用していることがわかった。

・質問「いつも公園で何をしているの？」に対して、 幼児と小学生は「遊具で遊ぶ」と回答した人が最も多く、幼児は 100%、小学生は 60%という結果になった。

→遊具は今後もあった方が良い。

◆ボール遊びを望む子どもたちは、幼児で 50%、小学生で 37%、中学生で 71%と多かった。

・質問「公園でどんなことがしたい？ 」に対して、「ボール遊び」を望む子どもたちは、幼児で 50%、小学生で 37%、中学生で 71%という結果になった。

→ボール遊び場のニーズが確認されたため、整備が検討に値する。

＜マルシェスタンド出店者アンケート＞

◆売上目標を達成した出店者が 100%を占めた。

・質問「売上目標の達成度」に対して「目標を達成した」の回答が 3 店舗/ 3 店舗(100%)という結果となった。

◆幅広い年齢層の方が来園した。

・質問「出店して感じたよかった点・課題と感じる点」に対して、”子どもやファミリーなどの幅広い年齢層の方が参加された”といった回答があり、幅広い年齢層の方と出店者が関わる機会となった。

調査方針１「ボールパーク化における安全と周辺への影響の確認」のまとめ

・アンケートやヒアリングから、大人、**小学生、中学生いずれからも「公園等でのボール遊び」を望む多くの声**が確認された。
・自身よりも**年齢が上の子どもがボールパークを利用している場合、その輪に入り遊びづらく**、その他の場所で滞留する子どもの様子を確認された。
・実験期間中**ボールがネットを飛び越えて車道に出てしまう**事が複数回確認された。
・防球フェンスの**組立と片付けには、大幅な人手と時間**を要した。

▶効果検証を踏まえた基本計画での検討事項

・**周辺公園の再整備計画等の方向性を踏まえ、エリア視点に基づいた再編を検討**する。
・子どもの年齢層（幼児や小学生など）に応じた、**棲み分けを意識した遊具や遊び場等（ボールパーク化含む）の整備を検討**する。
・防球フェンスは利用者の年齢や利用方法に応じた高さと配置を考慮の上、常設化を検討する。
・**ボールパーク化を望む声が多い**ことから、**多数の子どもたちの利用**が想定される。
・**子どもは自転車で来場する場合が多い**ため、防球フェンス近くでの**駐輪スペースの追加整備を検討**する。

調査方針２「多世代の滞留・活動に必要なことを確認する」のまとめ

・**キッチンカー・カフェスタンド、マルシェ、フリーマーケットを望む人の割合が高く、これらの企画をしたいという回答者がいた。**
・**幼児、小学生の半数以上が遊具を使用していた。**
・**休憩ができる場所を望む人の割合が多い。**
・仮設の**ゴミ箱の脇に家庭ゴミが放置**される、**公園に駄菓子のゴミを捨てられる事態**が生じた。
・実験期間中、**高齢者は木陰やベンチで憩い、子どもは遊具やボールで遊ぶなど、アクティビティの違いによって居場所の棲み分けが自然となされていた。**
・公園を東西に横切る**一部の車道を封鎖したが、大きな支障が生じなかったため、廃道が検討に値する。**
・会場に**電源や水栓がない**事で**苦労しているマルシェ出店者の姿**を確認した。

▶基本計画に向けた方針

・**アクティビティの多様化（マルシェ等）が伴う場合、ベンチやテーブルのさらなる設置が検討に値する。**
・**独立した公園の一体的な利用も視野に入れる再編は検討に値する。**
・大人（高齢者含む）と子どもの居場所の**棲み分けを意識した遊具や遊び場等（ボールパーク含む）の整備を検討**する。
・催し等における**仮設店舗向けのスペース・設備（電源、水栓等）の設置が検討に値する。**
・**イベント実施時において、ゴミ箱の必要性が確認できた。**

＜居心地の良さに関する調査＞

国土交通省で開発された、「まちなかの居心地の良さを測る指標（※)」を用いて、石原町東広場等の居心地の良さ・歩きやすさを評価した。社会実験前と社会実験中に実施した調査結果をチャートにて表す。詳細は以下の通りである。

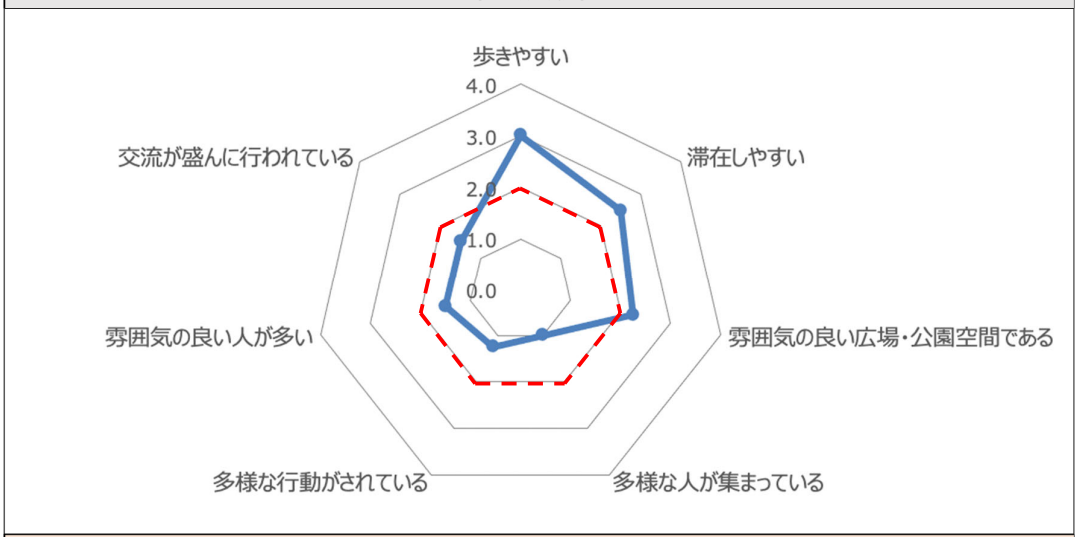
日常時の居心地は中間値よりも高いものがあるが利用に乏しい。社会実験でベンチ等の居心地の良さをさらに高め、多様なコンテンツを入れると、そこに魅力を感じる多様な人が集まった。

結果として、実験中の公園の魅力と環境の総合評価はいずれも大幅に向上した。また、滞在者数は 8 人から 43 人、交流者数は 2 人から 40 人という変化を確認できた。

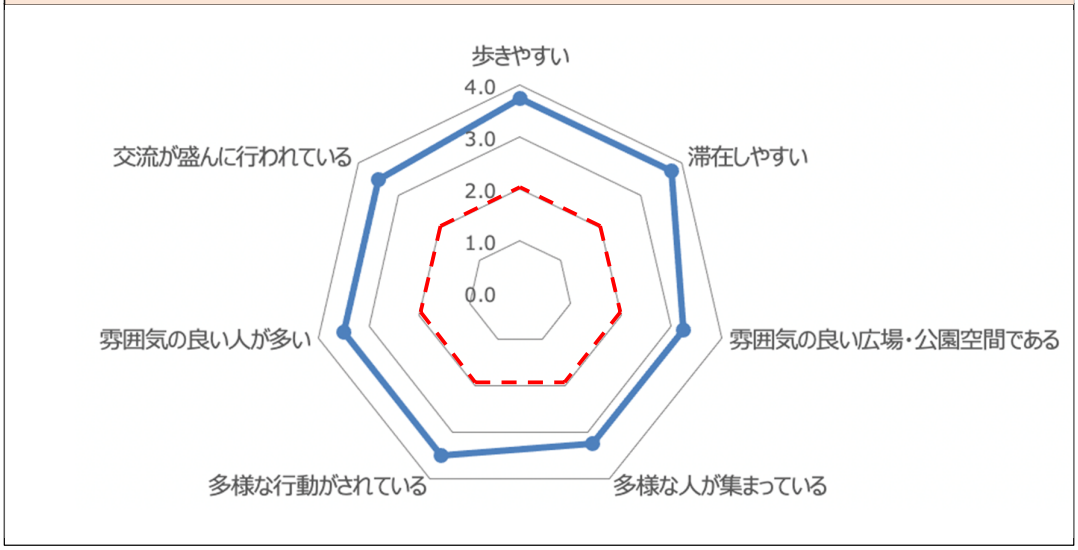
※まちなかの居心地の良さを測る指標：居心地が良く歩きたくなるまちの形成に向けて、人間らしい視点で居心地の良い空間を評価するツールとして、国土交通省が作成したものである。

広場・公園の魅力に関する総合評価

社会実験前



社会実験中



：評価結果　　：5 段階評価の中間値（2.0pt）

：評価結果　　：5 段階評価の中間値（2.0pt）

■人々の活動量※

滞在者数：８人(社会実験前）→43 人(社会実験中)

交流者数：２人(社会実験前)→40 人(社会実験中)

※滞在者数：３分間以上その場に留まっていた人数

交流者数：２人以上で滞在していた人数

■調査日

（社会実験前）令和 5 年 11 月　8 日（土）　　13：00~14：00　天候：晴れ　天候：18°C　評価者 5 名の平均値

（社会実験中）令和 5 年 11 月 23 日（木・祝）13：00~14：00　天候：晴れ　天候：19°C　評価者 5 名の平均値

０３　整備の方向性

１　課題とポテンシャル

凡例：　課題　ポテンシャル

計画地の課題とポテンシャルについて、下図を用いて示す。

●共通する課題

・異なる時期に整備された公園であるため、素材や色調が異なり、近接しながらも一体感を感じにくい

・日除けできる場が少なく、夏場や日中の滞留・活動がしづらい

●共通するポテンシャル

・いずれも土地区画整理事業等で整備され、高質な景観を意識した舗装材や美観を備える

・市域のその他の街区公園よりも比較的大きな面積を有するため、多様な居場所や使い方を生み出しやすい

・駐輪スペースがあり、近隣に加えて遠方からのより多くの利用者を受入れやすい（石原町東広場を除く）

●集いやすく周囲に開けた空間骨格

輪になり集いやすく、ラジオ体操等のコミュニティ活動が行われている

●多様な遊びの選択肢がある

すべり台やジャングルジム、ブランコなどの多様な遊具があり、同時に複数の子どもが遊びやすい

●車両交通量の少ない車道空間

車両交通量が少ないため、公園を行き来しやすく、一体利用することでメリットがある

●公園面積の多くを占める植栽枡

緑量を生み出す一方で、その一部が公園内での安全な歩行や活動、回遊スペースを狭めている

●区画分けされた植栽枡

複数の区画があり、多様な植物が育ちやすい空間骨格が存在する

●緑陰を生み出すシンボルツリー

高木のクスノキが滞留する人同士の距離感や日射しの調整を行い、居心地の良さを高めている

｜2｜ 踏まえるべき視点

関連計画や社会実験で抽出された市民の意識や意向に配慮することに加えて、リノベーション手法（視点）で整備を検討することが重要である。以下にて、その背景と理由を述べる。

＜リノベーション手法での整備視点の背景と理由＞

少子高齢化時代は、地方行政の財政的な視点では厳しく、**「行政単独での維持管理の難化」**を意味している。限られた予算の中で、現状の市民ニーズを捉え、公共施設・設備を維持することを求められており、そのため多くの自治体の中で公園を含む公共施設のあり方について検討が進められている。

一人でも、誰かとでも憩える社会の拠り所である、公園等のパブリックスペースが縮小・解体されることの私たちの暮らしへの影響は想像するに難しくない。一方で、人口減少時代においては、全国的に**一人あたりの公園面積は相対的に増加**していると考えられる。一人ひとりが使える公共スペースが増える流れを好転的に捉え、人がまちと関わる接点としての公園等のパブリックスペースをこれまで以上に多角的な視点から検討・再編することが肝要である。

こうした状況において、その場が備えている環境に目を向け、**不足する機能を補ったり、現状においては過剰な機能を削減し、価値をシェイプアップする「リノベーション」の視点が求められる。**主に建物活用の手立てとして一般化した、この「リノベーション」という手法を公園等のパブリックスペースにも用いることで、**行政が抱える財政的な負担の低減と、土地区画整理事業等により整備されたまちづくりや市民活動の継承を図る。**

最小限の改修により、居心地の良さや市民の活動環境を最大限高める。使い方の再編を促し、公民一体となった公園利用と管理の兆しを作ることで、市民の主体的な活動を起点にした公園利用率の向上や管理体制の構築を目指す。

｜3｜ 導入機能

多世代からのニーズが高いものから導入機能を検討する。関連計画や令和５年度社会実験でのアンケートやその他の効果検証を踏まえて、以下の３つを導入機能として抽出した。実験の結果から、全体の居心地の良さ・滞在性を高めつつ、キッチンカースペースや農園など多様なコンテンツを導入する方向性が望ましいとわかった。

1.「ボール遊び機能」

2.「商業機能（キッチンカー等のスペース確保）」

3.「コミュニティ形成機能（市民農園・市民花だん等）」

０４　整備コンセプト

みんなの“PLAY”が集う公園

～わ（輪・話）が広がる みんなの庭～

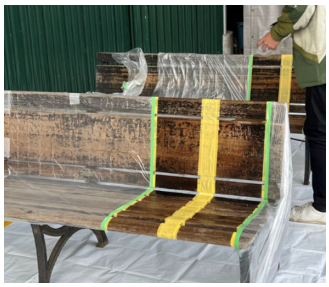
畑や花だんづくりを通じてみどりへの関心と居心地を高め、共通の話題と共に、楽しみながら活動の輪がエリア全体に広がっていく。

０５　整備方針と実現に向けた方策

整備方針１　**歩きたくなる・使いたくなる空間づくり**

方策①　楽しい色使いなどによる一体感を感じられる空間づくり

公園施設を塗装するなどにより、遊び心ある楽しい公園の表情を作る。ウォーカブルエリア全体への人々の回遊を促すため、周辺まちづくりなどと連動させる。また、共通のテーマ色を定めるなどエリア共通の取り組みを検討する。見て楽しめる、統一感ある仕掛けにより“歩きたくなるまちづくり”を推進する。加えて、点在するボラードや公園間の車道の一部を共通色で塗装することで、連続した風景と車両への注意喚起の両立を図る。



共通色でベンチを塗装した場合のイメージ（帯状に黄色で塗った例）

エリア共通のグラフィックデザインを導入し、統一感あるまちなみをつくる

色使いと塗装箇所の工夫で安全な歩行者通行と車両注意喚起をする風景のイメージ

整備方針２　**多世代が過ごしやすい空間づくり**

方策①　日除け環境の構築などによる滞在快適性の向上

小さな子どもや高齢者は成人に比べて体温調整が難しい。近年多発する異常気象による危険な暑さにより、日除け環境は日中や夏場の利用の安全性を高める上でも重要である。すでにあるベンチ上にパーゴラ等を設けたり、高木の緑陰を活かしたりすることで滞留や活動の快適性を高める。最小限の整備によって、誰もが安心して憩える快適な公園環境の実現を図る。

ミスト機能を持ったパーゴラとベンチのイメージ

高木による緑陰の風景イメージ

整備方針３　市民が関われる活動スペースづくり

方策①　「市民農園」・「市民花だん」などのスペースの導入

既存公園が持つ区画分けされた植栽枡の骨格を活かし、市民が主体的に公共空間（公園）に関われる使い方へアレンジする。公共施設の特性に鑑み、管理団体や地縁組織等が管理主体となることを想定する。多数かつ多様な人が関わる機会となり、地域コミュニティの形成等の効果が期待できる。

みんなで植える・育てる・食べるをテーマにしたコミュニティファーム（埼玉県草加市）

方策②　キッチンカー等の商業スペースの導入

公園を身近に感じ、多様かつ多数の利用を促すために、キッチンカー等が出店できるスペースを確保する。併せて椅子やテーブル類が並べられる滞留スペースも設えられる空間とすることで、商業機能との相乗効果を図る。

POPUP 店舗と滞留空間のイメージ（令和５年度社会実験）

キッチンカーの出店イメージ（羽衣駅前 社会実験）

整備方針３　活動を維持する体制づくり

方策①　都市再生推進法人等のまちづくり団体との協働・連携

行政のみで維持管理するのではなく、多様な主体と活動の橋渡し役として、都市再生推進法人等が中心となり活動することを想定する。例えばキッチンカー等の出店手続きに関しては、行政への手続きの代行を都市再生推進法人等が担い、その代行料を活動原資の一つとする。市民農園や市民花だんは、運営ノウハウを持つ民間の協力団体等と連携することで、地域コミュニティの醸成・活動維持につながることを期待する。なお、倉庫鍵や水栓鍵等の管理も管理団体にて行うことを想定する。

０６　整備計画

１　整備案の検討

導入機能をもとに２案検討した。以下に詳細を記す。

＜整備案①＞

※整備工事のタイミングや各種協議等により、整備内容は変更となる可能性がある
※市民農園管理者等が必要とする水栓・電気設備・倉庫等については今後占用等の可否検討を進める。これらの設備類の管理は都市再生推進法人等が担う想定とする

凡例：再活用・継承　更新 or 新設

●一体感のある風景作り
- 同一色での公園施設（ex ベンチやパーゴラ）の塗装等を想定する
- 見た目に楽しく、統一感が感じられる佇まいの構築を図る

※塗装色や塗装箇所、塗り方に関しては要検討とする

●ボール遊び用フェンスの設置
- ６m*10m*H４m 程度の自立式フェンスを設ける
- 小学生低学年までの利用
- 柔らかいボール（飛び出し防止）を前提に運用する

●多様な遊具がある公園
- すべり台やジャングルジム、ブランコなどの多様な遊具があり、同時に複数の子どもが遊びやすい環境を継承する

●廃道（公園化）による一体利用
- 車両交通量が少ない車道を公園化することで、より安心して滞留・活動できる公園環境をつくる。
- キッチンカーなどの出店スペースを創出し、公園利用の促進を図る

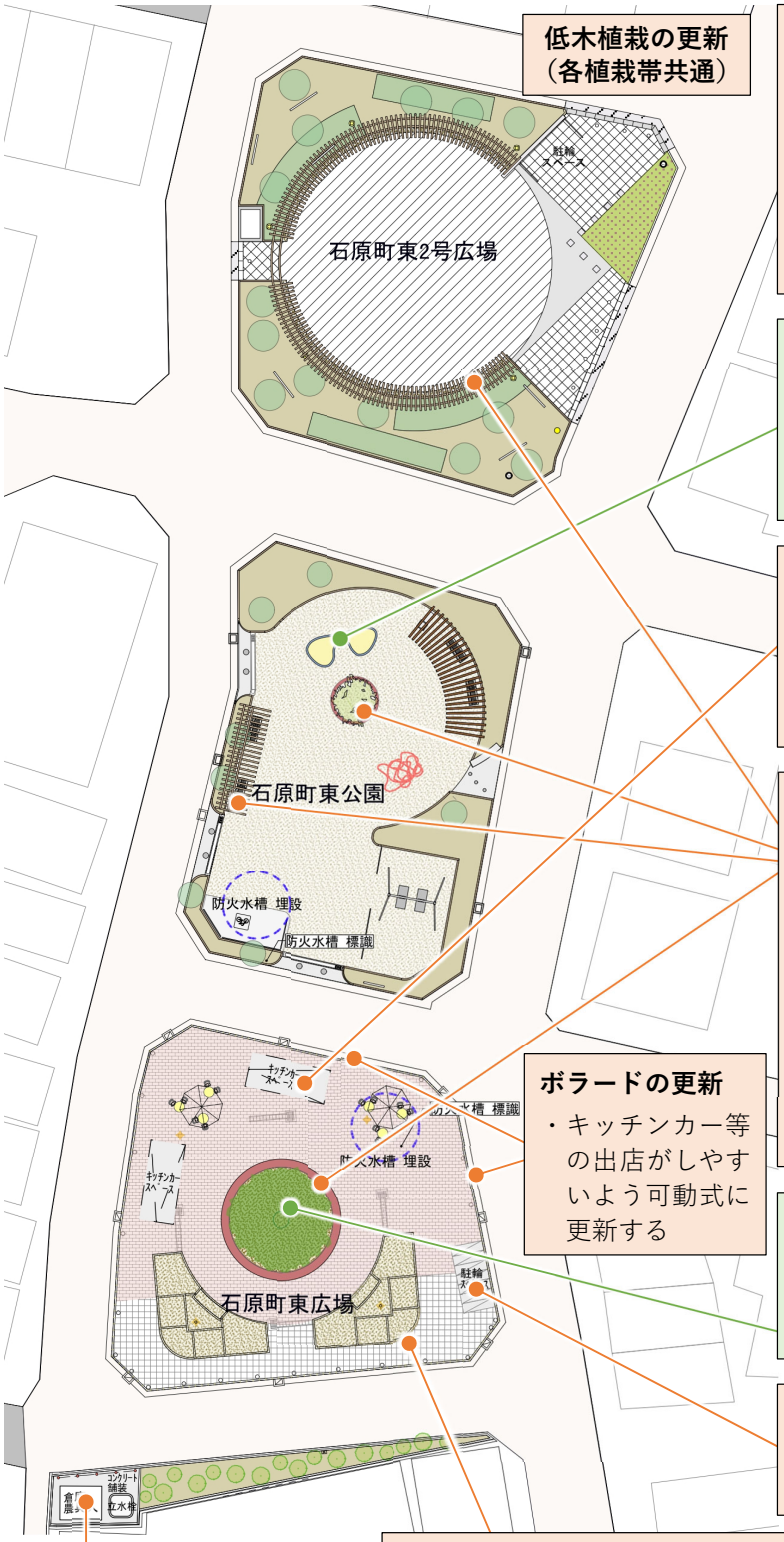
●歩行・活動スペースの拡充
- 植栽枡を一部撤去し、出店スペースも兼ねる歩きやすい歩行環境を作る。デッキベンチとの相乗効果を図る

●緑陰で憩う風景の継承
- 滞留する人同士の距離感と日射しの調整を行い、居心地の良さを高めるクスノキを継承する

＜整備案②＞

※整備工事のタイミングや各種協議等により、整備内容は変更となる可能性がある
※市民農園管理者等が必要とする水栓・電気設備・倉庫等については今後占用等の可否検討を進める。これらの設備類の管理は都市再生推進法人等が担う想定とする

凡例：再活用・継承　更新 or 新設



低木植栽の更新（各植栽帯共通）

●一体感のある風景作り
・同一色での公園施設（ex.ベンチやパーゴラ）の塗装等を想定する
・見た目に楽しく、統一感が感じられる佇まいの構築を図る
※塗装色や塗装箇所、塗り方に関しては要検討とする

●多様な遊具がある公園
・すべり台やジャングルジム、ブランコなどの多様な遊具があり、同時に複数の子どもが遊びやすい環境を継承する

●歩行・滞留・活動環境の拡充
・植栽枡を一部撤去し、園内の一部の舗装を更新する。歩行・滞留・出店等のスペースを拡張し、安全に滞留・回遊できる環境を作る

●パーゴラ・サークルベンチの設置
・いまあるベンチや円形の空間骨格を継承し、滞留・日除け機能を拡充する。パーゴラへのミスト機能の導入も検討する
・既存環境を活かし、子どもから高齢者まで多世代が過ごしやすい環境を最小限の改修により構築する
※パーゴラの設置位置については整備時に地元ニーズを踏まえ検討する

ボラードの更新
・キッチンカー等の出店がしやすいよう可動式に更新する

●憩いやすい緑陰風景の継承
・滞留する人同士の距離感や日射しの調整を行い、居心地の良さを高めるクスノキを継承する

駐輪スペースの設置
・お店利用者等の自転車利用を受け入れる

倉庫・水栓(鍵付)の設置
・農具や机椅子を保管

●市民農園・市民花だんの導入
・区画された植栽枡の骨格を活かしコミュニティを育むスペースを創出

｜2｜ 整備案の検討を通じて

多数の人が憩い、多様な活動が行われる公園整備において、日常的な滞留の快適性を向上させることが重要である。これには車両等に対する安全性だけではなく、滞留時の温熱環境への配慮も含まれる。

「まちなかの暑さ対策ガイドライン（令和 4 年度部分改訂版-環境省-)」によると、盛夏においては樹木の陰に入ると、頭上からの日射と足元からの赤外放射が大幅に減り、日向にくらべ体感温度(SET※)が 7° C 程度低くなる場合があるとされている。

こうした結果を踏まえれば、すでにある高木による緑陰環境を活かしてベンチを設けることや、既設ベンチに対してパーゴラを設けるなど、最小限の改修で滞留の快適性を高めることも可能と言える。

安心して過ごしやすいことで滞留・活動の時間はより長くなり、様々な人が集い、語らう機会の増加が期待できる。その蓄積が結果として、コミュニティ活動の維持・創出を支えることも考えられる。

つまり、滞留快適性の向上を起点とした、より多くの人に日常的に利用される環境には、コミュニティ形成機能や商業機能を高める効果が期待できる。市民農園や商業機能などの導入により、これまで公園に来なかった人が来るようなきっかけを作り、普段から利用している人たちにとっても心地よく滞留や活動ができる公園整備を目指す。なお、主な検討項目に関する検討結果は以下の通りである。

＜ボール遊びニーズについて＞

・整備案①のボール遊びニーズは、近隣で建設予定の「（仮称）浜町みらい公園」で担うことが望ましいと判断した。
・同公園は石原町東広場等と比較して、ボール遊びによる近隣への騒音の影響が少ないことや、常設のボール遊び用のフェンスを設置しても空間的にゆとりがある環境であることが理由として挙げられる。（門真みらい小学校と近接しており、公園面積は約 2,800 ㎡）
・より多くの子どもたちの利用環境を考えると、（仮称）浜町みらい公園での整備がふさわしいと判断した。

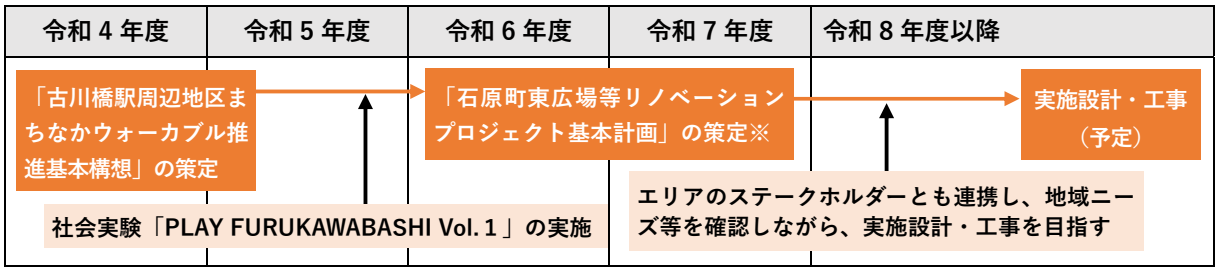
＜廃道（公園化）について＞

・道路管理者や警察等への協議の結果、公園利用を高める目的のみによる廃道は困難であることがわかった。
・キッチンカー等の出店による道路占用の許可は困難である。
・社会性のあるイベント、企画に限り、一時的な道路占用（キッチンカー等を除く）は安全性を確保するため許可される場合があり、公園の一体化利用の可能性がある。
・そのため、キッチンカー等は道路上ではなく公園内への出店・設置を想定する。
・なお、当公園を広く活用し、安全に賑わう公園となるよう、手法については引き続き検討する。

以上のことから、整備案②を基本計画として選定する。

０７　整備スケジュール

令和５年５月に「古川橋駅周辺地区まちなかウォーカブル推進基本構想」を策定。同構想に基づき、11 月に社会実験「PLAY FURUKAWABASHI Vol. 1 」を実施した。その結果を受け、本計画をとりまとめた。今後は、エリアのステークホルダーとも連携し、地域ニーズ等を確認しながら、実施設計・工事を目指す。



※古川橋駅周辺地区まちなかウォーカブル推進基本構想に示された４つのプロジェクトと合わせて策定